

## 巻頭によせて

校長 北 村 聡

Kitamura Satoshi



第二次世界大戦前のドイツ第三帝国時代、多くのユダヤ人が、ユダヤ人であるという理由だけで、ドイツ国内や占領地各地に設置された絶滅収容所、強制収容所等に収容され、銃殺、ガス室、飢えと寒さの中での過酷な強制労働などによって、600万人に及ぶ人々が命を落としました。輝かしい学問や芸術、科学技術を育ててきた偉大なドイツ人の歴史を思う時、この時代のことは重苦しい限りです。

オーストリアの精神医学者ヴィクトール・E・フランクルは、その絶望的な収容所の生活体験の中でなお、生きることの意味を問い続け、「夜と霧」という著作を残しました。

その中で「ここで必要なのは私たちが生きることから何かを期待するのではなく、むしろひたすら、生きることが私たちから何を期待しているかが問題なのだ。」「生きることはつまり、生きることに正しく答える義務、生きることが各人に課す課題を果たす義務、時々刻々の要請を充たす義務を引き受けることにほかならない。」と述べています。

苦しむこともまた生きることの意味の一つであり、苦しむに値する人間であることを自覚することが生きる力となるのです。

時代の変化はいよいよ急速で、現在の若者が生きて行く先は一層環境の移り変わりが激しくなり、予想できない多くの困難に直面することがこれまでの時代より多くなると考えられます。「自分は価値のない人間だ」と一人悶々と悩むことがあるかも知れませんが、決して絶望なさってはいけません。生還の見込みがほとんど期待できない絶望的な環境の中でさえ、生きることの価値を問い続ける人々がいたという事実がここにあります。

最早自分の力で変え難い、過ぎ去ってしまった過去の禍根に悶々とする事もなく、不確定な未来に必要以上に不安を感じることもなく、今日、なし得る限りの努力を続ける事が、この不可思議なる人生を生きるという事に他ならないとあらためて感じています。お互いに励まし合い「不撓不屈」を日々実践してゆきましょう。